



背景

昭和21年（1946）12月21日午前4時過ぎ、大地震が地盤の軟弱な中村のまちを襲いました。当時の全町2千余の家屋のほとんどを全半壊させ、夜明けまでに町は廃墟となりました。間もなく町中から燃え上がった火の手が拡大し、町並みを焼き払いました。渡川鉄橋も両端を残して墜落して、中村の町は壊滅に近い状態になりました。この話は、当時、女学生だった人の記録に基づくものです。

アクセス 南海地震碑

- 土佐くろしお鉄道中村駅より北西へ直線距離約3 km
- 四万十市中村 為松公園内
- 緯度経度 北緯32度59分49秒，東経132度55分47秒



昭和二年（一九四六）当時、女学生だった人の記録に基づく話です。
ふと目が覚めました。置時計を見ると、四時でした。「まだ早いな」と思いながら、またうとうとし始めました。ガタガタと障子のゆらぐ音がして、少し揺れました。「地震だ」と直感したとき、ふすま越しに兄が「起きているか」と言つて、庭に面したガラス戸を開け、外に出た気配がしました。少し心細くなって、私もついて外に出ました。寒かったので、思わず一枚の布団をかぶって出ました。
兄の傍まで行った時、突然大きな地の底からのような鳴動がして、大揺れが来しました。揺れはだんだんひどくなり、兄と抱き合ったまま地面に投げ出されました。足をすくわれ転がされたような感じでした。畑の中へころがりこみ、二人で頭から布団をかぶりしました。この世の終わりとばかり思われて生きた心地がしませんでした。
気がつくと、辺りはまた元の静けさに戻っていました。「あつ」と思わず声をあげました。私たちを呼ぶ母の声に駆け寄り、三人で一枚の布団にくるまりました。
「これで火事さえなかったら」と言っている近所の人に、あいづちを打っていた時、突然近くから火事が起こりました。火はみるみる広がりました。親を呼ぶ子、子を探す親、火の回りが早いため救出できずに生きながら火にまかれ焼け死んだ人など、本当にこの世の地獄でした。
母をかばいながら、安全な場所に避難しました。ようやく明けかけた町の姿は、昨日までとは全く違い無残な光景でした。